



# 高校生の 進路選択を考える

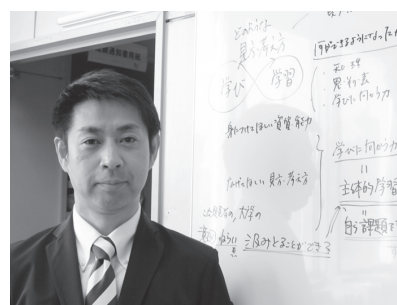
## 第10回 北海道旭川東高等学校

### 多様な価値観を持つ生徒たちの自己肯定感を高め 将来を選択する自信を育成するキャリア教育を推進

このコーナーでは、社会が変化し、高校教育・大学教育・大学入学者選抜も変わっていく中で、高校生の進路選択、高校での進路指導はどのように変わっていくのか、考えていく。

今回は北海道旭川東高校の進路指導部長である松井恵一先生にインタビューした。同校は、北海道第2の都市、旭川市に位置し、道内外に多数のリーダーを輩出してきた伝統校である。

同校は、「シマレ ガンバレ」の標語の下、「想」と「実」の両者を広げることで、生徒の進路を実現する指導を充実させている<図>。さまざまな取り組みの中から、「学びのフローラ」と「旭東アカデメイア」を中心に、そのねらいや具体的な活動内容についてうかがった。



松井恵一先生

#### 生徒の気質の変化を受けて 進路指導の在り方を再考

—2016年度頃から進路指導・キャリア教育の取り組みを再編しているとうかがいましたが、どのようなきっかけで改革を始めたのですか？

私は今年度で本校に赴任して15年目になるのですが、現行学習指導要領が先行実施された2012年度頃から、自分の進路選択に自信を持っていない生徒が増えたと感じていました。そして、生徒たちの自己肯定感の低さを何とかしたいという、課題意識をずっと持っていました。

そんな折、ある出来事が起こりました。私が担任を持った生徒の中で、首都圏の難関大学に進学した生徒から「就職活動をうまく乗り越えるこ

とができない」と相談を受けたのです。第一志望の大学に進学し、明るい未来が開けているはずだと信じていたのですが、「なぜ、そのような事態に直面したのか」とショックを受けました。

この出来事がきっかけで、「高校時代に学力以外にもっと身につけさせるべき“何か”が必要なのではないか、広げるべき視野があるのではないか」と、生徒の10年先、20年先を見据えた「キャリア形成」という視点から、高校における進路指導の在り方をもう一度、捉え直そうと思うようになりました。

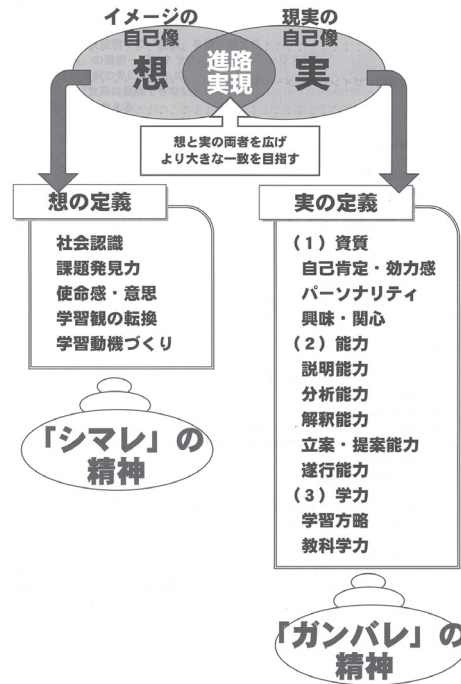
ひとたびそういう観点を持つと、15年間で感じてきた、本校の生徒の気質の変化について目が向くようになりました。

—15年前と近年では、貴校の生徒にどのような変化が見られますか？

本校は地域を代表する進学校ということもあり、昔は生徒間の競争意識が非常に強かったのですが、ここ7～8年で、そうした競争意識が薄れ、「誰かの役に立ちたい」という貢献意識を口にする生徒が目立つようになってきた印象があります。時代の流れとともに生徒の求めるものや、やる気の中身が変わってきているわけですから、進路指導のスタンスも変化しなければいけないと思いました。

そうした時に、従来のような「偏差値をもっと上げていこう」「難関大学をめざそう」という指導がふさわしいのだろうか。偏差値はもちろ

<図>「想実一致の進路デザイン」のイメージ図



ん大事ですが、1つのモノサシです。今は生徒の価値観も多様化しているし、進路選択に自信が持てないことや、自己肯定感の低さを払拭するような指導が必要なのではないかと考えているようになりました。

また、それを機に「指導」という言葉にも違和感を覚えるようになりました。これまでの学校での「指導」は、「できない人に、知識を持った教員が教える」という構図になりがちでしたが、今の時代に対応した「指導」の在り方とは、「支援」と「刺激」を生徒に与え、進路選択に自信を持てるように導くことではないかと思っています。一人ひとりが本来持っている能力を外に出す手助けをし、「刺激」すなわち「機会」を与えてあげたい。そんな新たな進路指導の在り方を踏まえ、2015年度から始めたのが「学びのフローラ」です。

### 10年先、20年先を見据えたキャリア形成をめざす「学びのフローラ」

——「学びのフローラ」とはどのような取り組みか、具体的にお聞かせください。

「学びのフローラ」は、1年生から3年生までの希望者を対象に、年間10回ほど実施しているキャリアデザインのための課外授業です。さまざまな職業に就いた本校の卒業生をはじめ、現役の大学生、地域の企業人など、北海道内外で活躍されている人たちを招き、現在のキャリアを選ぶに至った経緯や、研究内容・仕事内容などを語っていただいています。

わが街・旭川市には、知らなかつ

たけれどこんなユニークな企業があるのか、とか、生徒たちの思いもよらない仕事や生き方を選んだ人など、幅広くキャリア形成のロールモデルとなりそうな方たちにお声掛けしています。

例えば2016年度には、本校の卒業生であり、慶應義塾大学4年生のときにFULMA（フルマ）株式会社を起業し、日本初の小学生向け教育プログラム「YouTuber Academy」を開校した齊藤涼太郎さんに講演してもらいました。「ユーチューバーになってみたい」「何かを世界に伝えたい」という好奇心を持つ小学生に対して授業を行っているというお話は興味深いもので、生徒たちからも「刺激的だった」「将来を考えるきっかけになった」といった感想が寄せられました。

——「学びのフローラ」を実現するためには、幅広い人脈づくりが欠かせないと思いますが、松井先生はどのように人脈を広げていったのですか？

最初は地域で活動している知人などに、「キャリア教育を始めようと思っているので、機会があったら学校で仕事のことを話してくれませんか」と声を掛けていました。そうしているうちに、ある方から「東京で行われている“ハタモク（学生と社会人が働く目的を考え、語り合う）”という活動を、北海道でも実施しようとしている人たちがいるから、連絡を取ってみては？」と紹介されました。実際に会って話して意気投合するうちに、気が付けば私も北海道の“ハタモク”の運営メンバーになっていました。

そこで出会った人たちは、教員以外の業種の人も多く、実にいろいろな考え方や価値基準を持って、その人らしい生き方をしています。学校という世界で生きてきた私自身、目を開かれる思いでした。この“ハタモク”から広がる人的ネットワークは実に大きかったですね。

一方で、地元旭川の青年会議所の人々とのつながりも積極的に作って

いきました。多くが地元企業の二代目の方なのですが、皆さん、未来の地域を活性化できる人材を求めているんですね。ありがたいことに、本校が始めようとしているキャリア教育にも興味と理解を示してくれて、協力を名乗り出てくださいる人たちが、次々と現れたのです。

——地域との連帯は「学びのフローラ」の重要なコンセプトだそうですね。

そのとおりです。というのも、それまでは学校の中と外でほとんど接点がなく、本校は進学校として有名だけど、地域の人々には生徒の姿がほとんど見えなかったようです。一方、生徒たちは「旭川は何もない街だ」と思っていて、実は地元には魅力的でユニークな会社がたくさんあることを知りませんでした。

「学びのフローラ」を通して地元の企業の人たちと触れあううちに、生徒たちにとっても街が単なる通学路ではなくなり、「自分たちが何かやろうとするときに応援してくれる大人たちが、この街にはいっぱいいるんだ」と、意識が変わっていったように思います。

本校の生徒は、札幌市や首都圏に進学するケースが多く、いずれは旭川から外の世界に出ていってしまうのですが、何もない街だから出ていくのではなく、こんなにいい街から出ていくのだから、いつか故郷に帰ってくる日があったら、もっといい街にするにはどうしたらよいか、何が自分にできるのか…。そんな課題意識を持って出て行ってほしいと思います。「学びのフローラ」でも、地域の方々と先輩たちから、そうした姿勢を感じてほしいと思っています。

——「学びのフローラ」がスタート

して4年目を迎えた今、成果や手応えはいかがですか？

生徒たちの「ものの見方」が確実に広がっていると肌で感じています。刺激もかなり受けているようで、「将来は学校の先生になりたい」と言っていた生徒が、先程紹介した「YouTuber Academy」の話聞いて、「教員になることだけが教育に携わることじゃないんだ」と、違う角度から自分のキャリアデザインを考えるようになったりするなど、生徒たちの意識改革が見え始めています。

「女性のキャリアを考える」というテーマで、講師は女性、参加者も女子生徒限定、運営係の教員も女性という、男子禁制の講演会を催したこともありました。きっかけは、私が最初の担任を持った年の教え子が26歳のときに、「このまま仕事を続けるか、それとも結婚するか、今すごく悩んでいるんです」と相談にきたことでした。聞けば、仕事がおもしろくなってきたところだと言う。男性の20代後半と言えば、仕事はこれからが本番という年齢なのに、女性の場合は出産や育児も意識すると、このままの働き方を続けられるのかなど、選択を迫られるわけですよ。「女子ならではのキャリア形成があるのだ」と実感して、この企画を考えました。

この回は、参加した女子生徒たちにとっても好評でした。出席した女性教員にも「先生は、今後のキャリアをどのように考えているか？」などと質問が飛び、非常に白熱した議論になったと、後から聞きました。

運営面で生徒が主体的に取り組む姿勢を見せているのも、嬉しい収穫の1つです。年間10回を数える「学びのフローラ」のうち、3～4

回は「生徒企画版」として、生徒自らが講師を人選、出演交渉し、当日の進行もするようになってきました。また「出張版」と称して、市外や道外に聴講ツアーを実施することもあります。

### 自己肯定感の獲得につながる 自由な発想の場を提供する 「旭東アカデメイア」

——もう一つ、力を入れられている「旭東アカデメイア」は、取り組みの目的に「主体性・独自性・新規性が求められる新時代への対応力を育む、課題解決型の取り組み」とありますが、具体的にどのような学びを展開されているのでしょうか？

次期学習指導要領を見据えて、生徒が自ら課題と問いを設定して問題解決をできるようにと、2015年度から、課外授業の一環として1・2年生の希望者を対象にスタートした取り組みです。4年目を迎えた今年度より総合的な学習の時間で取り組むこととし、1年次での必修化を図りました。

内容的には、思考トレーニングを含め、「問題解決パラダイム」「価値創造パラダイム」「個別研究と発表」の3つの柱から成り立っています。

これまでは教員がいろいろな文献を参考にしながら、独自にテキストを作成し、試行錯誤で実践してきました。このたびの必修化に伴い、日常の学びと探究活動が連動していることに生徒が“気づき”を得られるように、目下、企画の練り直しを行っているところです。

3年間やってみて実感したのは、生徒たちのポテンシャルの高さです。度肝を抜くようなテーマを設定したり、大人が思いもつかない解決法や

アイデアを出してくるんですよ。特に印象に残っているのは、「旭東アカデメイア」がスタートした3年前、「忘れものをしないためにはどうしたらいいか？」という課題を出したときのこと。「鞆が勝手に付いてくるようにすればいい」と言った生徒がいました。

あまりに突拍子もない発言だったので、教員や他の生徒たちはみんな、「ええ？何を言ってるんだ」とそのときは大笑いしたのですが、昨年、キャリアケースが付いた鞆が動力で人間を追尾する動画がインターネットで出回って話題を呼びました。——実は先見性のある、すごい発想だったのですね。

そうなのです。そのときに思ったのは、「正解を言わなくてもいいんだ、思いついたことをそのまま言ってもいいんだ」と、生徒たちが安心して発言できる場が必要なのだ、ということでした。

これまでの学校教育では、子どもたちは「正解」ばかりを求められがちでした。裏を返せば、間違った答えを言うことを恐れて、自由な発想を口に出すことができなかつたかもしれませぬ。「旭東アカデメイア」が、そうした壁を突破するための「場」になればいいなと考えています。

### 進路を選択し続ける 自信を持たせるとともに 「光るもの」を引き出す

——「旭東アカデメイア」など、進路指導に取り組む中で、先生方はどのようなことを心がけていますか？

教員間では「大いなる不完全燃焼」を大切にしよう、と言っています。高校の間に、必ずしも研究を完成させる必要はありません。大学や

社会でも探究し続けることが大切だと思うからです。

今、九州大学に通っている本校の卒業生のエピソードなのですが、高2のときに「旭東アカデメイア」で取り組み、日本初と信じていた研究テーマに、先行研究があることがわかりました。生徒によってはここで研究を諦めてしまうところですが、その既存の研究は彼女にはどうしてもピンとこなかった。「もっとほかのアプローチがあるのではないか。自分なりにこの研究を追究したい。それができるのは九州大学だ」と、確固たる自信を持って大学選びをしたのです。

最初に「選択」に自信を持っていない生徒が増えていると申しましたが、AとBを選択しなくてはいけないとき、Aを選ぶとBを捨てなくてはならないと思うから、生徒たちはAを選択することが怖くなるのだと思います。あるいはAを選択したとき、後からBを選んだほうがよかったのではないかと後悔しそうだから、Aを選択できない。それであれば、「Aを選んだ自分は間違っていなかった」と思

える自己肯定感をいかに持たせるかが、重要な鍵となると思うのです。

選択することは怖くない。別の何かを捨てることでもない。選択し続けることができる自信こそが、キャリア形成に影響を与えるのであり、その自信を高校時代に得られるような機会を用意することが、本校のめざすべき進路指導だと、私は考えています。

どの生徒も必ず「光るもの」を内側に秘めています。偏差値は「次ここをもっと頑張ればいい」と判断するうえで大切な指標ではありますが、偏差値だけを進路指導の拠り所にする、と、数字的なモノサシでは測れない「尖った才能」を引き出せなくなってしまう。

偏差値ばかりに注目するのではなく、生徒がどれだけ納得して進路を選択できるか、旭川東高校だからできること、旭川東高校でなければできないこととは何か。課題意識を全職員で共有しつつ、社会変動に柔軟に対応しながら、これからもビジョンを見直していくことが必要だと感じています。

#### 北海道旭川東高等学校（全日制）

◇所在地：北海道旭川市6条通11丁目

◇沿革：1903（明治36）年 北海道庁立上川中学校として開校  
1950（昭和25）年 北海道旭川東高等学校と改称、男女共学となる

◇学級編成：各年次普通科7クラス

◇生徒数：838名（男子428名、女子410名）2018年4月9日現在

◇特色：1933（昭和8）年に制定された学校標語「シマレ ガンバレ」（どんなことに対しても妥協することなく、ベストを尽くそうとする精神という意味）が、現在も校風として息づく。生徒1人1人に対するきめの細かい学習指導の一方で、地域との連携を大切にしつつ、10年後、20年後を見据えたキャリア形成にも力を注いでいる。

◇卒業生の進路：2018年5月1日現在 卒業生279名  
・進路：4年制大学198名、その他81名  
・合格者の内訳（現役生、延数）：国公立大学158名、私立大学184名